

研究報告

母性看護学実習における看護学生の 自己評価に影響する実習体験に関する質的検討

Qualitative study on practical experience affecting self-evaluation of nursing students in maternal nursing practicum

和田 佳子 藤井智恵美 岸田 泰子
Keiko Wada Chiemi Fujii Yasuko Kishida

キーワード：母性看護学実習、看護学生、自己評価、実習体験

key words : maternal nursing practicum, nursing students, self-evaluation, practical experience

要 旨

本研究の目的は、母性看護学実習における看護学生の自己評価に影響する実習体験について質的に検討することである。母性看護学実習を終了し、研究の同意が得られた看護学部3年生の女子学生5名を対象に、2016年2月に学生が実習で体験した内容および実習の自己評価への影響について半構造化面接を実施した。分析は逐語録を作成後コード化し集約し、カテゴリー化を行った。自己評価に影響する実習体験として、【看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり】、【褥婦の心のケアの難しさ】、【対象者への敬意をもった接し方】の3カテゴリーが抽出された。また、実習の満足感として、【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】、【妊娠褥婦との関わりからケアにつながった自信】、【教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ】、【スタッフの対応による実習の充実感】、【生命の誕生と児の生命力の実感】の5カテゴリーが抽出された。看護学生の母性看護学実習の体験から自己評価には、実習の準備性、知識に基づいたケアの実施、教員やスタッフといった人的な影響が明らかになった。

Abstract

The purpose of this study was to qualitatively examine the aspect of practical experience affecting self-evaluation of nursing students in maternal nursing practicum. After completion of the practicum, nursing students from the School of Nursing, third grade, completed a self-evaluation. In February 2016, five female students consented to participate in this study; in addition, semi-structured interviews were conducted about the impact of the self-evaluation after a nursing practicum and experiences with the nursing practicum. Word-for-word data was encoded, and then categorized. With practical experience affecting self-evaluation, three main categories were extracted: "How to respectfully communicate with the subject", "Difficulty associated with the psychological care of puerperal women", and "Level of understanding due to the possible deployment of nursing process deepening". With respect to satisfaction with the practicum, five contents were extracted: "Sense of reassurance that students could practice technical exercises before practicum", "Self-confidence stemming from increased involvement with pregnant and puerperal women," "Encouragement that teachers are in the practicum field and teachers do not deny a student", "Sense of fulfillment of the practice by the staff," and "Feelings associated with birth and newborn vitality of life." Consequently, it was concluded that practical experience in the maternal nursing practicum of nursing students who participated in self-evaluation enhanced their approach, including increased readiness for practicum, better implementation of knowledge-based care, and human effect, such as teachers and practicum leaders.

I 緒言

母性看護学実習は2週間で、妊娠期および分娩期、さらに産褥・新生児期の母子を受け持ち、各時期の生理的变化に応じた看護を実践するが、多領域の実習と大きく異なる点はウェルネスの視点で看護過程を展開することにある。つまり、母性看護学実習での対象者は妊婦、産婦、褥婦、新生児と健康度が高く、さらに、母性看護学実習のケアの特徴として、対象者のプライバシーにかかわる配慮が必要な看護技術であることが多い¹⁾。また近年、少子化の影響により、分娩数や対象者の減少、実習施設確保の困難さといった母性看護学実習方法における今日的課題が取り上げられている²⁾⁻⁴⁾。加えて、これまでの母性看護学実習における実習内容や学生の学びについての分析では、母性看護学実習の技術経験内容の状況の把握が多くなされており⁵⁾⁻⁸⁾、効果的な教育についての検討がされてきた。

また、母性看護学実習における体験が、実習の達成感や満足感、自身の母性観が深まり、人間関係に影響し自己成長につながるということが明らかになっている⁹⁾⁻¹³⁾。われわれが母性看護学実習における学生の自己評価と実習経験項目および満足度について検討したところ、看護過程は8割以上、「受け持ち褥婦と家族との人間関係を築くことができる」、「自己の母性・命についての考えを述べることができる」の項目については9割以上の学生が「できた」と答える高い自己評価をし、実習の満足度についても8割以上の者が満足しているという結果が得られた¹⁴⁾。このような、学生が「できた」と感じる達成感や実習に対する満足感は、実習で経験できた内容によって異なるのではないかと考えられる。母性看護学実習における体験と自己評価に関して、学生の記述した自己評価表を分析した調査によると、事前学習の準備ができていない学生は看護についての理解を深め自己目標の達成度が高く、学習が不足している学生は目標も低く達成度が低い。また、分娩見学が看護実践に対する満足度を高めていることが報告されている¹⁵⁾。一方、実習に対する満足感について、早期看護実習の効果を検討した結果では、実習の満足感のみが看護を学ぶ意欲の因子であることが見出されている¹⁶⁾。母性看護学実習における学びの

要因についての調査では、外来の学びは実習前の事例分析や学内演習が有効であり、分娩見学が分娩経過や看護の理解に影響していることが明らかにされている¹⁷⁾。

以上のような先行研究の結果から、学生の自己評価、達成感、満足感の内容については十分に把握されていない。適切な自己評価を行うことは、評価者の学習の動機づけや学習の改善につながることから¹⁸⁾、母性看護学実習での学生の自己評価が、どのような実習体験によって影響され、その評価の高低を規定しているのか具体的に検討し、母性看護学実習における効果的な教育実践につなげる必要があると考える。

そこで本研究は、母性看護学実習における看護学生の自己評価に影響する実習体験について質的に検討することを目的とした。

II 方法

1. 研究デザイン

本研究デザインは、質的記述的研究である。

2. 調査時期

調査時期は、2016年2月であった。

3. 研究協力者

A看護系大学3年生で当該年度の母性看護学実習が終了し、調査への同意が得られた5名であった。なお、当該学生の実習記録は提出済みであるが、評価は開示されていなかった。

4. 母性看護学実習の概要

母性看護学実習は、マタニティサイクル（妊娠・分娩・産褥期および新生児期）における母子とその家族の特性を理解し、対象を尊重したケアを提供するための基礎的能力を養うこと、および、人の性と生殖に関する意義を理解し、女性の生涯を通してのリプロダクティブ・ヘルスにおける看護援助と看護職者の役割を学ぶことを目的としている。実習は3年次10月から4年次の7月までの期間に、妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の看護および、女性のライフサイクル全般に関するテーマ学習について、2週間でローテートして学ぶ。実習初日には、妊婦、褥婦、新生児看護の援助技術を演習する時間を設けている。褥婦・

新生児の受け持ち実習では、原則1名の褥婦および新生児を受け持ち、看護過程展開を実施している。実習評価は、「対象の理解」、「看護援助」、「テーマ学習」、「実習態度」の25項目からなる、4段階の評価基準（4：できる、3：指導・助言によりできる、2：少しできる、1：指導・助言があってもできない）による、自己評価と教員評価からの二方向評価としている。

5. 調査内容

調査内容は、基本属性（学年、年齢）と自己評価に影響している実習中の出来事であった。

6. 調査方法

3年次後期の10月～12月に実施された母性看護学実習を含む領域実習終了後の2月に、母性看護学実習終了者に集ってもらい、研究の目的および方法、倫理的配慮を研究者が説明し研究への協力者を募り、同意書を封筒で回収した。

面接はインタビューガイドを用いて、半構造化面接を個別に実施した。面接はプライバシーが保持される場所で実施した。また、面接は承諾を得、ICレコーダーに録音をした。

7. 分析方法

録音データから逐語録を作成し、研究者間で繰り返し読み、実習体験における自己評価への影響についての文脈に着目し、最小単位の意味内容を抽出した。抽出された意味内容を要約してコード化し、意味内容の類似性に基づいて集約し、分類してサブカテゴリーおよび、カテゴリーを生成した。カテゴリー化に際し、母性看護学教育に携わる研究者間で一致が見られるまで検討、討議を行い、信頼性を確保した。

8. 倫理的配慮

3年次後期の母性看護学実習を含む領域実習終了後に、研究者が学生に対し口頭および文書により、研究の目的および方法、倫理的配慮について説明し、同意書への署名にて同意を得た。その際、研究への参加の有無が科目成績に影響せず、研究に不参加の場合も不利益のないこと、結果は個人が特定されない方法で取り扱い、研究以外には使用しないこと、プライバシー保護に努めることを約束した。研究不参加の場合も同意書に無記名とし、研究への参加、不参加に限らず封筒にて提出を求め回収した。なお、研究者の所属機関において研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：KWU-IRBA#14056）。

Ⅲ 結果

分析対象は3年次看護学生5名で、性別はすべて女性、年齢は20～21歳であった。看護学生の面接の内容を分析した結果、母性看護学実習における看護学生の自己評価について、学びに関する自己評価と満足感に影響した実習体験が抽出された。母性看護学実習の自己評価に影響した実習体験として、12コード、5サブカテゴリー、3カテゴリーが生成され、満足感に影響した実習体験として、31コード、13サブカテゴリー、5カテゴリーが生成された。平均面接時間は、35分（25分～41分）であった。実習の自己評価点に影響した実習体験について表1に、満足感に影響した実習体験について表2に、カテゴリーおよびサブカテゴリーを示す。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [], コードを『 』で表記する。

1. 実習の自己評価に影響した実習体験

【看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり】、【褥婦の心のケアの難しさ】、【対象者へ

表1 母性看護学実習の自己評価に影響した実習体験に関するカテゴリーおよびサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり	看護過程としての思考の成立
	実習におけるウェルネスな看護過程展開による理解の深まり
褥婦の心のケアの難しさ	母子の時間の確保や言葉がけにおけるメンタルケアの困難さの実感
	褥婦の本音や心境が話されたことの感謝と、さらなる気付きへの反省
対象者への敬意をもった接し方	対象者への敬意をもった接し方

の敬意をもった接し方】の3カテゴリが生成された。

1) 【看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり】

『きちんと記録は毎日書(いていた)』き、『記録と向き合って、自分に足りているかと考え(た)』ることで、〔看護過程としての思考の成立〕をしたこと、さらに、『実習ではウェルネスの考え方で母性にあった看護過程が出来た』、『教員より助言をもらって演習より看護過程が分かった』ことから、〔実習におけるウェルネスな看護過程展開による理解の深まり〕により、自己評価をしていた。

2) 【褥婦の心のケアの難しさ】

『積極的に心のケアに入るほうが良いのか、母子二人の時間を持ってもらうほうが良いのか判断がつかなかった』、また、『どのタイミングで話を聴くほうが良かったのか分からなかった』と、〔母子の時間の確保や言葉がけにおけるメンタルケアの困難さの実感〕をしていた。さらに、学生が褥婦に対してケアをする中で、〔褥婦の本音や心境が話されたことの感謝と、さらなる気付きへの反省〕をしたことを語っていた。

3) 【対象者への敬意をもった接し方】

〔対象者への敬意をもった接し方〕について、

学生は対象者には『敬意や尊敬を持って人として接することはないがしろにしたくない』が、『言葉使いが稚拙で自分の考えを伝えられないという反省点や不十分な点がある』ことから、自己評価をしていた。

2. 実習の満足感に影響した実習体験

【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】、【妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信】、【教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ】、【スタッフの対応による実習の充実感】、【生命の誕生と児の生命力の実感】の5カテゴリが生成された。

1) 【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】

実習の『直前にも演習室で演習(をすることができた)』をし、『実践では子宮底長の測定がスムーズにでき、練習をされていて良かった』と、〔直前の演習での確認による看護技術への大きな安心感〕を語っていた。

2) 【妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信】

褥婦に『足浴をさせていただいたとき、褥婦さんがいい反応をして下さ(った)』り、〔褥婦の反応がケアにつながったという自信〕になったこ

表2 母性看護学実習の満足感に影響した実習体験に関するカテゴリおよびサブカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ
実習前に演習ができたことによる技術への安心感	直前の演習での確認による看護技術への大きな安心感
妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信	褥婦の反応がケアにつながったという自信
	妊婦・褥婦との関わりへの苦悩と感謝されたことに対する安堵
	分娩時の腰部マッサージ実施によって、やるべきことができたという思い
教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ	実習の場に教員がいることでの質問しやすい雰囲気
	教員が常時いてくれることでの心強さ
	教員からの否定されない関わり
スタッフの対応による実習の充実感	スタッフがケアと一緒に実施し説明してくれることによる充実感
	スタッフによる学生を学ばせようとする対応
生命の誕生と児の生命力の実感	児の個性の豊かさと生命力の実感
	児の日々の成長を感じる喜び
	母と子のスキンシップを身近に感じ、生命の誕生のすばらしさを再確認できた実感
	命がうまれるエネルギーへの感動と衝撃

と、また、『セルフケア（能力）が高い方をどうすればいいんだろう（と悩んだ）』と、〔妊婦・褥婦との関わりへの苦悩と感謝されたことに対する安堵〕が語られた。さらに、分娩時に『何をすればよいか分からなかったが、分からないなりに（がんばって腰をさすった）』、〔分娩時の腰部マッサージ実施によって、やるべきことができたという思い〕を語っていた。

3) 【教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ】

『教員がずっといたからよかった』、『切羽詰ったときに緊張ほぐれた』、『教員から否定されなかったことが大きい』と、〔実習の場に教員がいることでの質問しやすい雰囲気〕、〔教員が常時いてくれることの心強さ〕、〔教員からの否定されない関わり〕が語られた。

4) 【スタッフの対応による実習の充実感】

『スタッフが褥婦の部屋に必ず一緒について来てくださった』、『スタッフが説明しながらケアをやってくださった』と、〔スタッフがケアを一緒に実施し説明してくれることによる充実感〕と、〔スタッフによる学生を学ばせようとする対応〕が語られた。

5) 【生命の誕生と児の生命力の実感】

新生児の『一人ひとり声が違い、個性が豊かだと思った』面や、新生児と『はじめて触れあって、生きている、すごいと感じた』、新生児を『抱かせていただいて、ちっちゃい、生きている、あたたかいという感動と戸惑いがあった』ことから〔児の個性の豊かさと生命力の実感〕をし、『看護過程を展開し、懸命に生きているところを見ることができた』、『褥婦とともに（日々の成長を感じることができた）』〔児の日々の成長を感じる喜び〕を語っていた。さらに、『母乳をあげているときの褥婦の穏やかな表情やあたたかな雰囲気を身近に見ることができた』から、〔母と子のスキンシップを身近に感じ、生命の誕生のすばらしさを再確認できた実感〕をしていた。また、『命が生まれる瞬間に遭遇し、（エネルギーを直に感じた）』〔命がうまれるエネルギーへの感動と衝撃〕も感じていた。

Ⅳ 考 察

母性看護学実習における看護学生の自己評価に

影響する実習体験について質的に検討したところ、自己評価と満足感の内容が見出された。

実習の自己評価に影響する実習体験として挙げられた【看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり】、【褥婦の心のケアの難しさ】、【対象者への敬意をもった接し方】は、母性看護学実習の目標および目標に基づいた、評価表の「対象の理解」、「看護援助」、「実習態度」に対応していた。基礎看護学実習を対象にした看護場面の自己評価の特徴の一つに、学生は患者の健康状態を再吟味して看護目標を捉えなおし評価することが明らかになっている¹⁹⁾。看護学生は対象者の看護を通して、実習で養う知識、技術、態度の側面から評価を実施することができていた。

看護過程の展開では、〔看護過程としての思考の成立〕がしたことや、『実習ではウェルネスの考え方で母性にあった看護過程が出来た』ことから、〔実習におけるウェルネスな看護過程展開による理解（の深まり）〕をし、看護過程展開により対象の理解が深まった場合に、自己評価点が高まることが考えられた。自由記載の分析により母性看護学実習の学びの一つにウェルネス志向の理解が抽出されており²⁰⁾、母子の受け持ちによる看護過程の展開が、楽しく学びの多い母性看護学実習につながることから²¹⁾、〔実習におけるウェルネスな看護過程展開による理解の深まり〕という学びが自己評価に影響していたと考えられる。

褥婦の心のケアについて、〔母子の時間の確保や言葉がけにおけるメンタルケアの困難さの実感〕をし、『言葉使いが稚拙で自分の考えを伝えられないという反省点や不十分な点がある』といった反省点や不十分さから自己評価していたことから、実習に対する自己評価点には、対象者に向かう態度や心理面への気づきが充分でない場合に低下することが考えられた。母性看護学では、直接的なケアが少ないことによるコミュニケーションの難しさがあり²²⁾、褥婦の分娩に対する受け止め等の心理面や育児知識・技術の獲得に向けてのケアでは、看護者の情緒的サポートや褥婦が育児に対して自信をもてるような保証が大切となる。学生にとって、褥婦の心理面が難しさを感じたケアであり、〔褥婦の本音や心境が話されたことの感謝と、さらなる気付きへの反省〕や、〔対象者への敬意をもった接し方〕が挙げられたこと

は、学生は母子への心理面へのケアの必要性にとどまらず、母子の看護への実践に向けた理解を深めて評価に結び付けていると考えられた。

実習の満足感に影響する実習体験として、【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】、【教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ】が挙げられたことから、実習の事前準備ができ、教員とのよい関係やスタッフと行う充実したケアが安心感や充実感につながり、【妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信】より、妊産褥婦のよい反応がみられケアが適切であった場合に自信を持ち、さらに、【生命の誕生と児の生命力の実感】をすることが、実習の満足感に影響すると考えられた。

実習の〔直前の演習での確認による看護技術への大きな安心感〕を得たことは、実習前の学内演習により、実習の学習効果や意欲が上がるという報告と同様の結果であり^{17) 23)}、【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】が満足感に影響していた。母性看護技術の未習熟は実習を否定的に受け止める要因となり¹³⁾、これまでも母性看護学実習を充実させるための事前準備の検討がされている²⁴⁾。実習前の演習が学生の満足感に影響することからも、実習前の準備を整えることが重要である。

〔妊婦・褥婦との関わりへの苦悩と感謝されたことに対する安堵〕や、〔褥婦の反応がケアにつながったという自信〕を持ち、【妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信】が挙げられた。母性看護学実習に対する女子学生の思いについて分析した結果、学生は他領域とは異なる健康な母性看護学の対象者との関わりを難しく感じていたという報告がある²¹⁾。また、良い人間関係を保つことや、行った看護効果が確認できることは、実習を肯定的に受け止める要因となっている¹³⁾。さらに、受け持ちからの感謝の言葉が学生の自信や達成感につながることで、受け持ちとの関係ができ母子と実際に関わることで、母性看護学への意識が変わることが指摘されていることから^{11) 25)}、対象者との良い関わりからケアが展開できた時に、学生の自信につながると考えられた。

臨床指導者や教員からの助言は対象者との良い関係や主体的な学習に結びつくこと、また文献レビューより、教員と指導者の関わりが学生の実習

の達成感や看護観の育成に影響し、実習の満足度を上げるために学生と教員・指導者との関係が重要であることが見出されている^{26) 27)}。結果からも先行研究と同様に、教員とスタッフの関わりにより学生は心強さや充実感を感じ、それらが実習の満足感に影響していた。

【生命の誕生と児の生命力の実感】が実習の満足感の要因の一つに挙げられた。母性看護学実習に肯定的な感情を持つ背景には、実習中の分娩見学があるといわれている²⁸⁾。また、新生児期における看護技術の実施経験率は、妊娠期、分娩期、産褥期に比較し高いことが報告されていることから⁴⁾⁻⁸⁾、今回の結果からも分娩期や新生児への看護を通して、生命に関わる体験が実習の満足感に影響していた。

これまでに技術体験による実習における達成感が指摘されている^{1) 29)}。さらに、臨地実習前の学内演習が実習への達成感につながるという報告がある²³⁾。今回の結果から、学生の実習の体験と自己評価の内容として満足感とは語られたが、達成感は見出されなかった。達成感とは、広辞苑第6版では「ものごとを成し遂げたことで得られる満足感」³⁰⁾である。面接をした学生は5名であり、この学生達が今回の実習体験からは達成感を感じなかったことも考えられるが、【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】は感じており、実習中に、ものごとを成し遂げたという思いまでは到達せず、達成感までは感じていなかったのではないかと推察する。

以上のことから、母性看護学実習における看護学生の自己評価に影響する実習体験の具体的な内容が明らかになった。実習に対する自己評価には、対象者に向かう姿勢や心理面への気づきが充分でない場合に低下し、看護過程展開により対象の理解が深まった場合に高まることが考えられた。さらに、実習の事前準備、教員とのよい関係やスタッフと行う充実したケアが安心感や充実感に、妊産褥婦のよい反応がみられケアが適切であった場合に自信を持ち、また、分娩や新生児から生命力を実感することが、満足感に影響すると考えられた。看護学生の母性看護学実習における自己評価を高める実習体験として、実習の準備性、知識に基づいたケアの実施、教員やスタッフといった人的な影響が予測された。今回は一箇所

の大学で、また対象者が5名と少なく、一般化するには限界がある。選択のバイアスがあると考えられるが、今回の結果からは看護学生の実習の自己評価は、実習の満足感を持ち、実習目標に基づいた学びである評価を基準にして評価していることが示された。実習の満足感が看護を学ぶ意欲に影響するといわれているが¹⁶⁾、看護実践時の達成感や満足感が「看護場面の自己評価を阻む可能性」があることも指摘されている¹⁹⁾。効果的な母性看護学実習を行うにあたり、看護学生が学習意欲を持ち実習に臨み、看護を学ぶことができる教育目標、および評価基準と教育実践の方法について、学生の自己評価を含めた検討が必要であると考える。

V 結 語

母性看護学実習における看護学生の自己評価に影響する実習体験について、質的に検討した。実習の自己評価には、【看護過程の展開ができたことによる理解度の深まり】、【褥婦の心のケアの難しさ】、【対象者への敬意をもった接し方】の実習体験が影響し、さらに、【実習前に演習ができたことによる技術への安心感】、【妊産褥婦との関わりからケアにつながった自信】、【教員から否定されない関わり方と教員がいる心強さ】、【スタッフの対応による実習の充実感】、【生命の誕生と児の生命力の実感】といった実習の満足感を感じていることが明らかになった。

付記

本研究は、平成27年度総合文化研究所研究助成を得て行われた。

また、本研究の一部は第36回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

引用文献

- 1) 笹木葉子, 小堀ゆかり: 母性看護学実習における学生の技術経験状況調査——学生の母性看護学実習技術チェックリストから——, 北海道文教大学研究紀要, 36, 81-91, 2012.
- 2) 山口雅子, 山内栄子: 母性看護学実習, 大学教育実践ジャーナル, 5, 27-33, 2007.
- 3) 梅崎みどり, 富岡美佳, 井上理絵: 母性看護学実習における教育方法に関する文献の検討, 山陽論叢, 21, 11-18, 2014.
- 4) 木下照子, 谷野宏美: 母性看護学実習の施設別に見た学生の母性看護技術経験の検討, 新見公立大

- 学紀要, 31, 125-131, 2010.
- 5) 前山直美, 山本江里子, 石川智子: 母性看護学実習における学生の看護技術の現状と課題, 神奈川歯科大学短期大学紀要, 2, 75-80, 2015.
- 6) 中田久恵, 大槻優子: 母性看護学実習における技術経験状況調査, 医療保健学研究, 5, 129-139, 2014.
- 7) 都竹友季子, 出口陸雄, 野田貴代: 看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第9報) 母性看護学実習における看護技術経験項目の実態調査と看護学生の意欲, 愛知さわかみ看護短期大学紀要, 9, 7-15, 2013.
- 8) 成田恵美子, 渡邊竹美, 糠塚亜紀子他: 母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査, 秋田大学医学部保健学科紀要, 15(1), 58-67, 2007.
- 9) 神谷美樹, 高杢裕子, 小原まゆみ, 他: 母性看護学実習において看護学生が感じる満足感・達成感の分析, 九州国立看護教育紀要, 10(1), 8-15, 2007.
- 10) 浅野賀子, 馬場真紀, 尾端博子, 他: 母性看護学実習で学生が興味や達成感を感じた出来事や場面の実態, 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要, 7, 78-83, 2011.
- 11) 布施明美, 本多千恵子: 母性看護学実習における看護体験と学び——実習後のアンケートより——, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 2, 48-54, 2005.
- 12) 中島久美子, 土江田奈留美, 國清恭子, 他: 母性看護学実習体験からみた学習効果の分析, 群馬保健学紀要, 24, 31-42, 2003.
- 13) 宮本政子, 野口純子, 竹内美由紀, 他: 母性看護学実習における学生の学習意欲に関する要因——実習に対する意識と実習評価から——, 母性衛生, 42(1), 198-206, 2001.
- 14) 和田佳子, 藤井知恵美, 岸田泰子: 母性看護学実習が看護学生の描くライフコースに与える影響と看護学生による実習評価との関係——実習の満足度, 技術経験項目, 自己評価点との相関関係——, 共立女子大学看護学雑誌, 2, 10-16, 2015.
- 15) 志賀くに子, 伊藤榮子: 母性看護学実習における自己評価の分析(第1報), 日本赤十字秋田短期大学紀要, 3, 35-40, 1998.
- 16) 高橋清美, 中野榮子: 学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足感——内発的動機づけによる実習効果——, 福岡県立大学看護学部紀要, 1, 29-39, 2003.
- 17) 北林ちなみ, 中山美香: 母性看護学実習における学びの評価とそれに関連する因子, 飯田女子短期大学紀要, 28, 59-70, 2011.
- 18) 舟島なをみ, 杉森みどり: 看護学教育評価論, 文光堂, 東京, 9-28, 2000.
- 19) 丸茂美智子, 阿部房子: 実習体験に対して看護

- 学生が行った看護場面の自己評価に関する研究
— 自己教育の観点からの検討 —, 千葉看護学
会会誌, 15(1), 18-26, 2009.
- 20) 井田歩美, 齊藤早苗: 母性看護学実習における学
生の学びと実習目標との関連性, ヒューマンケア
研究会誌, 2, 36-40, 2011.
- 21) 都竹友季子, 出口睦雄, 野田貴代: 看護学生の母
性看護学実習に対する意識調査(第7報) — 母
性看護学実習において看護学生が実感できる看護
の魅力とは —, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 8,
37-44, 2012.
- 22) 贅育子, 三宅絢花: 母性看護学実習に対する女
子学生の実習前のイメージ, 実習中感じたこと,
実習後の思い — テキスト間イニングによる分
析 —, ヒューマンケア研究会誌, 5(2), 21-
28, 2014.
- 23) 太田愛, 大澤豊子, 森田桂子: 母性看護学実習に
おける臨地実習前学内演習の効果について, 帝京
平成看護短期大学紀要, 23, 7-11, 2013.
- 24) 緒方妙子, 坂井邦子, 江島峰子: 母性看護学実習
を充実させるための効果的な事前準備に関する検
討 第一報 — 実習終了後の四年生へのアンケー
トから —, 九州看護福祉大学紀要, 10(1), 31-
39, 2010.
- 25) 徳田眞理子, 甲斐寿美子: 母性看護学実習におけ
る学生の意識変化, 帝京平成看護短期大学紀要,
17, 21-25, 2007.
- 26) 原田秀子: 臨地実習における看護学生の達成感に
影響する要因の検討, 山口県立大学看護学部紀要,
8, 93-98, 2004.
- 27) 千田美紀子, 米田照美, 清水房枝: 看護教育にお
ける病院実習に関する研究の動向分析と今後の課
題, 人間看護学研究, 11, 45-52, 2013.
- 28) 野田貴代, 都竹友季子, 出口睦雄: 看護学生の母
性看護学実習に対する意識調査(第2報) — 実
習後の気持ちと進路希望との関係 —, 愛知きわ
み看護短期大学紀要, 5, 57-64, 2009.
- 29) 小野寺祥子, 大野友子, 高橋慶子, 他: 母性看護
学実習における看護技術体験の実態と到達度につ
いての課題, 帝京大学医療技術学部看護学科紀要,
2, 63-72, 2011.
- 30) 新村出編: 広辞苑第6版, 岩波書店, 東京, 2008.